

第3回 浜松市未来デザイン会議 議事録

平成26年1月26日（日）午後2時00～午後4時00分
浜松市役所本館8階 全員協議会室

1 開 会

（事務局） ただいまから、第3回浜松市未来デザイン会議を開会します

2 浜松市長挨拶

（事務局） まず、浜松市長からご挨拶申し上げます。

（鈴木市長） 委員の皆様には休日にもかかわらず、第3回浜松市未来デザイン会議にご出席を賜り、ありがとうございます。本日は基本構想の素案について議論いただきますが、この策定にあたっては年末年始、大変お忙しい中を3回にわたってご議論いただいたことも重ねてお礼申し上げます。今年度内には基本構想を固め、今年中には基本計画を含めた実施計画を策定するというスケジュールを考えていますので、いよいよ大詰めに差しかかったということになります。是非皆様の活発なご議論を期待いたします。30年という期間について、ちょっと長いのではないかとされる方がありますが、私は決して長いという感覚は持っていません。個人的な話ですが、今から35年前、松下政経塾に第1期生で入塾しました。松下幸之助さんは1980年当時に、「このままいったら21世紀の日本が危ない」と大変危機感を持っておられた人でした。国がこんな国家経営をしていたら、21世紀になる頃、日本は大変な借金を抱え、国の活力がなくなって大変なことになる、今から先を見越した手を打たないといけないとおっしゃっていました。当時はそんなふうになるのかなという程度の認識しかありませんでしたが、今振り返ると、まさに松下さんが心配した通りの状況になっています。国の借金も1,000兆円を超えました。こういう事態になるということは30年以上前から心ある政治家の中では、わかっていた方もおられたと思います。しっかりした長期的ビジョンの下、将来を見越して手を打っておけばこのようなことにならなかったのではないかと考えています。それと同時に、国の活力を取り戻すために道州制の導入等も、当時から熱く提言されていましたが、今まさに安倍政権において、国のプライマリーバランスを黒字化するという、あるいは道州制の議論も現実味を帯びてきています。35年前に、政治家の皆さんが長期的視野に立って、手を打っておけば、今頃あたふたしなくても良かったのではないかと思います。そういう意味ではしっかりとした長期的視野を持って、政治を進めていくというのは、国政に限ったことではなく、私たち地方自治体も今後はそうした視点に基づいて自治体経営をしていかなければならないと思っています。すでに皆さんも色々な情報を得られていると思いますが、少子高齢化の波の中で、将来の浜松の状況が十分予測できる中、我々は何をしていけば良いかということについて、是非皆さんの知恵を出していただきたいと思っています。当然人口が減ってくれば、我々がやらなければいけないことも見えてきます。インフラの整備にしても、そういうことを想定してやって

いかなければなりませんし、超高齢社会になるということであれば、高齢者の方がもっともっと社会参加したり、活躍したりできる場をどう作っていくかということも今から手を打っておかなければいけません。こうして長期的な視野に立った行政をするということは、我々にとっても大きな課題であり責任ではないかと思っています。是非皆様の色々な知恵を出していただいて、今年の市のキーワードは「ツナグ」ですので、責任を持って次世代につなぐ総合計画にしていきたいと思っています。皆様の活発な議論を期待しています。

(事務局) それでは、議事に入ります。進行は、会議のコーディネーター役をお願いしている静岡文化芸術大学 根本学部長をお願いします。

3 策定スケジュールについて

(根本学部長) それでは本日の会議に移ります。策定スケジュールについて、これは間を空けて何度か会議をやっていますので、今我々はこのプロセスのどこに位置しているのかを皆で確認して、その上で今日は新しい資料の報告があります。市民意識調査中間報告について、その後これまで意見交換会でアイデア出しをしたものを事務局でまとめた資料があります。中間報告や、意見交換会で出た材料を踏まえて、市長さんからもあったように自由闊達に建設的に議論を進めていきたいと思っています。それでは最初に策定スケジュールについて事務局から説明をお願いします。

(事務局) (資料2説明)

(根本学部長) ありがとうございます。これはあくまで確認ということで、これまで議論してきた流れを思い出していただけたらと思っています。いよいよ材料を出してまとめるというレベルのところでは最終段階に近づいてきています。言いたいこと、指摘しておきたいことなど、これまでご意見をいただいたかと思いますが、それをとりまとめていく段階だとご理解いただければ良いかと思っています。

4 市民意識調査中間報告について

(根本学部長) 次に次第の4、市民意識調査中間報告について、後でこれを使って議論、意見交換に進んでいきたいと思っていますので、まずは材料について事務局から報告してください。

(事務局) (資料3説明)

(根本学部長) ありがとうございます。結構な量の資料ですが、特徴的なところを事務局から説明をしていただきました。意見交換・質疑に進んでいきたいと思いますが、冒頭で少しSNS等を使ったデータの分析、見方について老婆心ながら、一応研究をやっている人間として、一言だけ追加させていただきます。事務局も慎重にお話しいただいたようで、確かにビッグデータというのは、言葉が先にあり流行りものみみたいなどころがありますが、大きく分けると定量的なデータと定性的なデータ、数字で測れるデータとそうで

ないものに分かれます。テキストマイニング、マイニングというのは鉱山を一生懸命掘るようなものですが、これは定性的なものであり、使い方や分析の手法が試行錯誤されている状況にあります。とりわけ、情報科学や社会科学では批判もありますが、どう使ったら有効か、現在進行中だとお考えいただければ良いでしょう。定量的なものはもうかなり成果が上がっています。例えば天気予報の精度が上がったとか、あるいは交通渋滞の予測の精度があがったとか、これは確かにビッグデータです。リアルなセンサーで道路や天気をモニターしていますが、その観測点には限りがありますね。それをインターネット等、時々刻々と上がってくるデータで補完すると非常に高い密度で、自然現象や交通の様子が分かります。他方、定性的なものというのは、実はビッグデータと一括りにしていますが、見方によっては決してビッグではありません。今回の63,000件のデータを分析してもらいましたが、80万人の人口の8割がネットにつながっていると64万人。この人たちが時々刻々と情報を発信したら数千万件になるはずで、だからこれは決してビッグではない。ネットの中の情報という意味でビッグデータというジャンルで読まれています。そういうふうには理解して良いかと思えます。ただ、だからといってこれは重要性がないかという点を決してそうではなくて、事務局からもあったように、自ら積極的に発信する情報、それから、つながりというキーワードがありましたが、ネットの中で情報感受性の高い人たちが、もっと言うとオピニオンリーダーと言われる人たちが、そうだよと発言するとコピーされて、リポートされて、広がっていく。悪い方へいくと炎上となりますが、良い方向にいけば新しい世論ができあがってくる。そんな状況があるのだと思います。ということで今回これをご覧いただくにあたっては、これが世論調査に代わるものであるとか、今までの市民意識調査よりビッグなものであると思込んでしまうとちょっと危険かと思っています。非常にエクスペリメンタルな、試験的なものであり、時代を先取りするような、オピニオンリーダーの人たちの意見が遠近感でいくと、強く見える、そういう特性を持ったデータであると思って使えば良い訳で、そのように利用が進められればと思っています。長くなって申し訳ありません。では皆さんから、このデータマイニングのキーワードの抽出の状況、それから事務局から幾つかあった、例えばカーシェアリングというのは現在浜松ではそんなに盛んではないのではないかな、私の知る限り。でもSNSの中ではかなり議論されているということがありました。あるいは働くとか、子育てとか、女性の活躍、こういったところでは、もっと良くしようよ、もっと改善の余地があるよというところに一つ特徴があります。あるいはイノベーションとか、人材育成というところに意見の盛り上がりがあったねという指摘がありました。これも含めて、皆さんの中から、このデータの中で、ここの部分どうなんだろう、ここは使えるのではないか、ここをもうちょっと注意深く見よう、この裏側にある背景は何だろう、あるいはこういったSNSのデータ分析についてどうなんだろうとか、中身の問題でも良いですし、データの特性の問題でも良いので、いかがでしょうか。

(酒井委員)

ビッグデータの利用ということで行政がどうか、そもそも浜松市でやられるのもほぼ初めてな例として、非常に注目を集めていると思いますが、見せていただくと非常に有用で、もっとインターネットそのものが、ネガティブなもの勝手に思っていました、かなりポジティブな意見も多くて、しかも現実的に即した意見が沢山出てきているなということ、正

直、大変失礼な言い方かも知れませんが、期待していなかった以上に素晴らしいデータが沢山出てきていて面白いと思って見せていただきましたが、特に面白いと思ったのはエネルギーの分野で、普段の話の中で出てくるエネルギーというと、太陽光発電であったり、省エネの技術をどうしていいかというのが注目される中、ページをまたいでしまって申し訳ありませんが、公共施設の方にも小中学校への太陽光パネルの設置、公共施設の屋根貸し太陽光発電とか、公共施設に関しては非常に現実的なものが記載されている中で、エネルギーに関しては、浜松市の技術力による新エネルギー、レーザー核融合も核融合の内なので核融合、バイオマス、小水力とか、いわゆる先進的な新しい技術というものがインターネットの世界では議論され、注目されているのは非常に面白いなと感じました。浜松市の皆さん全体がそう思っている訳ではないかも知れませんが、少なくともそういう意見があって、そこを例えば市民の意識調査とかで拾ってくるというのは、先ほど63,000件とおっしゃっていたかと思いますが、実際63,000人の人にインタビューすると、市の職員の方々が朝から晩まで転々としても多分到底集めることができない。ところがこうやってビックデータにしっかりこういったものが出てくるというのは、これから行政や他の公的なものにどんどん使われていくなという未来的なものであり、重要だと感じました。

(根本学部長)

ありがとうございます。エネルギーのページのことを触れていただいたので、ちょっと見るとレーザー核融合と出てきます。普段あまり幅広く議論が出ていないかも知れないです。浜松は楽器とオートバイは有名ですが、光電子技術とか非常に重要な基礎技術を持っています。また原発の問題は今政治的にも議論になっていますが、科学者に言わせると核分裂というのはまだ途中段階です。汚いものを作っているとは誰も思っていません。このプロセスを経て、究極は核融合に至るのだ、クリーンな水素のエネルギーに行くのだと専門家は言っています。そうすると一歩先を見ている優れた基礎技術と応用技術を持っている浜松市でこういう議論がされているというのが浮かび上がってきました。他にはどうでしょうか。

(村田亜委員)

資料を見ていて面白いなと思ったのが、ものづくり産業というところと働くというところの関連性です。ものづくり産業ではプラスの意見が出ていますが、逆に働くというところではマイナスの意見が出ていると思います。浜松市の特徴として、ものづくり産業に携わる人が多い割に、実体的には働くことに関してはマイナスな意識を持っているというのが面白いと感じました。働くということに関して女性の立場の意見がワードとして出てきていると思います。女性とか母親が情報を集めるのにSNSを多用しているというのも一つあげられるかと思います。子育て世代の目線で言うと、集団の場所や情報を集めるのにネットを多用し、近所だけでは情報収集にも限界があるので、ネット上に情報などを求めている、同じく働くことに今女性が非常に興味を持っているということと、そういうものを引き合いにしたビジネスなりNPOなりが盛んに活動されているのかと感じて興味深かったです。安倍首相が女性の登用を言われているので、ますますネットに上がってきているし、興味を持つ人が多いのかなと思っています。

(根本学部長)

今のご指摘には二つ重要な点があると思います。一つはキーワードごと

に分析したものを見ている訳ですが、キーワード同士の関連性があるということ。同じような部分に関連するものづくりと、働くという部分でプラスマイナス、光の当たる部分が違っている状況がある。せっかく作ったデータなのだからキーワード相互の連関性というのが一つ分析の大きなヒントになると思います。

もう一つは、SNSの使われ方で、特に子育ての情報が中々手に入らない、あるいはボランティアな人たち同士で支え合おうというのが、ネットの中で急速に広がっているという様子が見て取れるのではないのでしょうか。また過去皆さんと3回意見交換をした中で出たのが、今までずっと「やらまいか」のイノベーションで育った企業が、今や世界の大企業に育っています。良くも悪くもサラリーマンという生活スタイルが定着しました。でも21世紀は多様な働き方になるのではないかという議論が出てきました。そういう意味でいうと、ものづくりのキーワードで拾ったところに光が当たるのは現在成功した、世界に冠たる企業社会の部分が見えているのかも知れません。それから子育ての部分がもう少し草の根的に、ネットワークでつながっているところが(表の)左側となっているのかも知れない、というようなお話だったかと思います。あと一つ二ついかがでしょうか。

(村田昌委員)

今の比較の話と同じですが、エネルギー・環境ということに関しても、前向きなチャレンジをすることに対して関心を持っている結果が出ていますが、一方で住まうという実際に自らがエネルギーを使う行為に関しては環境やエネルギーがあまり出てこない。これが本音と建て前が出ているのか、一般論で聞かれると良いことを言うが、自分の行動がどうかというと、もっと目先の、外壁をどうするかのような話になっている。それも現実なのだろう、そういう意味では現実が浮き彫りになっているような結果だという印象を受けました。

(根本学部長)

目の前のことで気になることは当然浮かび上がってきます。一方で未来志向の部分も浮かび上がってきます。そこにはギャップがあります。それをどう受け止めるかということ、未来を見ているが、未来だけ見ていてそれが良いのだといっても、ひとりよがりになる恐れがあります。目の前の生活実感に叶ったビジョンの打ち出し方を、市と一緒に考えていかないといけないという問題提起だったと思います。

(田中委員)

まとめは非常に大変だったと思いますが、どうしてもまとめると抽象的になりやすいと思います。数字で、1+1は2と出ると良いのですが、そうならないから大変じゃないかと思っています。市民から30年をどう評価されるかということ、本来は数字的に出ないと評価されないのではないのでしょうか。あとエネルギーの関係ですが、色々な太陽だ、水力だ、とやっていますけれども、反面使うエネルギーを減らすことも考えないといけません。浜松市内には防犯灯が63,000灯あります。25年度から5年間でLED化することです。LEDにすると電気代金が5割以上減ります。新しい方法で電気を増やすというのは非常に良いことですが、行政的に減らすというのも大事だと思っています。将来新しいエネルギーができて、これは楽しい良いということで、どんどん使ったら努力した意味がなくなりますから、減らすことも頭に入れて進んでいかないと費用が減らないと思っています。

また、一番は教育が全ての基本だと思っています。市長が子ども第一主義と言っておられますが、教育によって産業から住まいから色々な部分に広がっていくのですから、計画にはそういうものを入れて、30年かけて浜松は素晴らしいまちだというふうにしたいと思います。

(根本学部長) 教育という部分は確かに意見交換会でも随分沢山皆さんから出た意見だと思っています。よろしければ市長さんからデータについて何かご意見はありませんか。

(鈴木市長) 私も興味深く見せていただきました。何となく予測できるものと、意外だなと思ったところも多々あって、これからこういう常識的に考えている事と、意外と潜在的に眠っている市民の方々の意見などを顕在化させるには良い手法ではないかと思っています。

(根本学部長) ありがとうございます。今回は未来のビジョンを策定するために皆で意見を出していますが、今後とも、市民あるいは他の人たちと、行政とのコミュニケーションのチャンネルはふんだんにあった方が良くと思います。是非活用を考えていただきたいと思っています。この資料についてはのちほど使うので次に進んでもよろしいでしょうか。後でまたビッグデータに戻っていただいても構いません。

5 浜松市未来ビジョン（基本構想）素案について

(根本学部長) 市民のインタビューやインターネットを使った分析、そして過去3回の私どもの意見交換を元にして、一つの素案、たたき台、議論の材料をまとめていただいているので、次にそれを説明していただきます。

(事務局) (資料4、5説明)

(根本学部長) ありがとうございます。資料4については、これまでの議論やデータを使ってたたき台を作りました。ここからは意見交換に移りますが、論点としては、まず未来ビジョンのたたき台の目次の部分のまとめ方、くくり方が一つあります。もう一つは中身の問題として、今日の段階では12の動詞を使ったキーワードにくくっています。過去3回の意見交換会の内容がちゃんと反映されているかどうか。ここは足りない、追加したい、内容について、あるいはケチるという言い方がどうかというような中身のこと。それから最後の論点は、全体を視野に入れて先ほどのデータマイニングとかも含めて、これまでの皆さんの発言に追加してさらに発言いただければと思います。どれからでも良いのでいかがですか。

まとめについて事務局に骨を折っていただきましたが、私も相談に乗って作ったので、一言申し上げると、改めてこうして目次をみると、未来像は一つドンとある。その次に1ダースが来る。これを市民の皆さんに説明をする、あるいは分かりやすく打ち出すときに1の次が12って、もう一個中間があっても良いのではないかと事務局と話したことがあります。この12は12で全部なくしてしまうとすごく抽象的になってしまうので、項目は多少中身を変えることはあっても、10個とか8個はあっても良いと思いますが、間に入れるとは何なのか。下手につくると中二階、屋上屋になる恐

れがあります。あくまで将来像の全体像と一つ一つ中身をつなぐということはあっても良いとは思いますが。例えば天・地・人など。これまでの意見交換会を振り返ると、一つは恵まれた気候条件、豊かな恵みをもたらす農林水産業と、そして全国有数のものづくりの産業が共存している。この天賦の才能というか、非常に有利な地域資源を持っている、これは天の采配でしょう。地というのは、これまで出た議論はチャレンジする、イノベーション、人が活躍する。ものづくりだけではなく医療、福祉、教育でも、よしやろうと市民の自由闊達な発意が形になってビジネスになっていくという議論があったかと思えます。最後に、人というのは、田中委員からも出たように、未来に向かって広い意味で教育というのが非常に大事だろうというものです。新しい世代が育っていく、もちろん高齢者の方も最後まで自分が主体的に活躍する。人がつながって活躍するという人の部分です。そんなふうには3つぐらい柱があっても良いかと個人的には思いました。天・地・人、2番目の地だとすると、つながる、ネットワーク、めぐるという議論を前回しました。上流・中流・下流の流域全体で資源や文化、水、そして人の交流が巡っていく。あるいはエネルギーや食糧供給が巡っていくというようにまとめられたら良いかと事務局と話をしました。皆さん、いかがですか。

(松尾委員)

「1ダースの未来」の中で、いろいろな動詞が入れられていますが、「活かす」というのはほとんど全てに絡んでくるのかなと感じました。特に「ケチる」のところこそ「活かす」ではないかと思えます。ここにある「活かす」の5番はどちらかという「育てる」なのかなと、目次を見た時には思いました。10番の「ケチる」、1番の「満たす」それから「高める」も全部「活かす」に入ってしまう気がします。「活かす」の使い方は大事です。活用の仕方があると思いました。

(根本学部長)

ありがとうございます。おそらく12個並べた中の上位概念ではないでしょうか。概念のシソーラスというのがあります。12個、あるいはアイデアとして出ましたが今日は載っていないという中で、前に出るのとそうでないのがあるかも知れません。あといかがでしょうか。

(杉山委員)

目次の構成に関して、未来ビジョンの素案を読み物として読むなら、楽しく読めて良いと思えますが、これは何かを調べる時の資料として見た時に、どこを見れば良いか分かりにくい構成だと思います。この動詞の横に25の柱に準じた表記があれば良いと思えます。キーワードを幾つか入れて、多分重複するところが出てくると思えますので、それが逆に良いと思えます。ものづくりに関心がある人はものづくりで重複した番号だけをつまみ読みできるような、読む人が能動的に組み合わせて読めるような資料になると良いと思いました。

(根本学部長)

とても重要な指摘ですね。調べる側の目を見た時に、キーワード、インデックスを付ける。色々な方法があると思えますね。

(村田昌委員)

先ほども同じようなことを言いましたが、何か自分事と他人事の距離感がすごくある気がしました。これを市民全員に配られたとしても、良いもの作ったね、で終わってしまい、自分には関係ない、となるのもったいないと思えます。カテゴリー分けという意味では、個人にとって関わりのあ

ること、家族単位で関係があるとか、町単位で関係があるとか、市全体で関係があるとか、何か距離感がつかみやすい分類がされていると、これは自分のことだなとか、そういう意識で見られるだろうと思いました。25で分けるのも分かりやすい方法なのでしょうが、内容ごとに分ける方法と、自分との距離感を感じられる分け方があると自分に身近に感じられるかと思いました。

(根本学部長)

ありがとうございます。最初に事務局と材料を全部テーブルに上げた時に、ちらかった感じがありました。それを構造的に整理できれば、第3者に分かりやすく説明ができます。そのときに我々研究者が使うのは、空間的広がりと時間軸を使います。空間的広がりですと自分の目の届く身の回りの一番小さい単位の空間、個人でできること、それから家族、コミュニティと広がっていくと思います。最近の防災でいうと、自助・共助・公助があります。一人でできること。環境に良いことをしようと思ったら、市民一人でもできることは何だろうと探したら見つかります。それから家族全員ですること、仲間を募ってすること、というふうに輪が広がっていく。そういう空間的な整理ができます。もう一つ、時間軸がここには入っていません。今でもやっている、すぐできるというのと、30年後にはできていると良いなというのが整理の視点になるかと思います。枠組みの話だけでなく、中身の話でもピンポイントでも良いのでいかがですか。

(酒井委員)

私事ですが、先週東京でタクシーに乗りました。その運転手さんは68歳でもう年金を受けている人でしたが、車のナビがあるのに、別の携帯端末を持ちながら、それでお客さんに、どこそこのバス停の名前とかを言われても全然わからないので、この辺ですかと見せながらやり取りをしているということでした。示されたデータ集の高齢者のインターネット利用率のところを見ていると、新しいデバイスがあると、新しいつながりが出てきたり、という流れの中で、ちょうど未来ビジョンのなかで、「使う」の中にICTの話があって、そんなことを思い出しました。言葉遣いは悪いかも知れませんが、高齢者の方が新しいデバイスを用いることによって画期的に何か、それこそかっこいい老い方になっていくようなことがあったり、新しい教育の中で使われていく、というところでデバイスがあったりということがもう少し書かれていたり、今ある現状の中ではこういう書き方で良いかも知れませんが、もっとこうしていきたい、ああしたい、こうなりたみたいな部分が未来ビジョンだから書かれていくべきことかと思いました。それから未来の理想の姿12の「使う」という表現がほとんどICTのことについて書かれていますが、使うという言葉でいいのかどうか、「発信する」なのか、「受信する」なのか、何が適切かは分かりませんが、動詞だと難しいところも正直あると思います。この動詞を使うというのは非常にインパクトがあって、良い試みだと思うので残していきたいですが、適切な言葉が見つかりません。

(根本学部長)

一つはさっき時間軸ということを申し上げましたが、現在見えているところで出ている意見と、こういうふうになっているだろうということなのでしょう。おそらく現在のIT技術というのは、過渡期であり、最終形態ではありません。色々な操作を覚えないとできないのではなく、あって当たり前、直感的な操作でできてしまう、段々そうなっていますよね。だから20年後30年後には、これは情報機器だぞと意識して使わなくても、直

感的に触れば使えるというふうになっているかも知れません。その辺の書きぶりはあると思います。あとはいかがでしょうか。

(前田委員)

4ページの中ほどの林業分野について、個人的に関わりが深い部分なので発言させていただきます。「体験型の林業観光が人気です」と書いてありますが、やはり未来ビジョンだと、目指すべき方向、はっきりした方向をここに表記すべきだと思います。林業観光というのは、これから考え得る林業と他分野の友好の一つの例でしかないと思います。文脈を林業というものに関して、もう少し総括的な未来のビジョンを考えられるような文言に変えた方がふさわしいと思いました。未来ビジョンなので、実際に林業に関わっている人間や現場の人間が、これを読んで共通の理想として歩めるような文章に変えて、自分もこれから協力して変えていけたらもっと良くなるかと思いました。

(根本学部長)

何か追加するとしたら、どんな項目に変えるとか追加するとか、なにかありますか。

(前田委員)

林業観光というと、一つの小さくくりになってしまうので、もう少し総合的に林業という分野について浜松市がどのように考えて、どのような方向に導いていくか、また現地の人間と話をし、そういう方向に持っていくか、というもうちょっと理想というか、共有できる言葉を盛り込んでいくのがふさわしいと思います。

(根本学部長)

農業でも農業観光という言葉がありますし、本業としてもものを生産するという意味と、プラスアルファで観光や交流がありますが、付帯的要素、プラスアルファが目立ちすぎると本業はどうなるのか、あくまでも林業が林業として持続可能な産業としてあり続ける、その一つの要素として観光があるということでしょうか。それは今まで通りのことをやっていれば良いということでもないでしょうか。未来の林業がどんな姿になるのかの議論を深めていきたいと思います。あとはどうでしょうか。

(松本委員)

林業に関したことですが、都市の将来像の中で2ページ5行目に「先進的な農業を営み」となっていますが、将来像の中に農業だけでなく林業も加えていただきたいです。農林業という言葉にいただきたいです。やはり浜松市というのは合併したことによって北遠地方という広い範囲が入りました。それを生かしていくということに入れてほしいですし、入れないとバランスが取れないということになってくるのではないのでしょうか。特に林業については、今は問題があって低迷していますが、世界的に見ればドイツなど就業人口が多くなってきています。何故それができないかといえ、日本の林政が悪いために問題は色々あってできていませんが、30年後だったら資源を生かしてそういう方向に持っていくべきでしょう。将来像の中にはぜひ入れていただきたいというのが、私の個人的な願いです。

(根本学部長)

合併して大きくなったから多様性、多様な資源を持った自治体であることをよく踏まえて議論を進めていければと思います。他にはいかがでしょうか。

(村田亜委員) 働くというところに違和感を覚えました。国民の義務という表現に驚きました。浜松市民の、ということだったのに、急に国民とは何故だろうと思いました。中身をみると自由にチャレンジすることを積極的にしていこう、という未来という意味で義務ということと、誰でも平等という意味で国民ということかなとは思いますが、浜松市の、ということであれば、国民というよりは他の表現の方が、一人ひとりがそれを目指して頑張りたいと思うかなと感じました。この中に戸籍や性別に関係なく、とあったので、外国人もチャレンジをできるような浜松市ということで、そこもあったので、国民という言葉を変えられないかなと思いました。中身は就業コンシェルジュという言葉もあって、こういうのが本当にあったら良いなと感じたので、キーワードを見てから、次に続く文章を読んでいくので、キーワードをもうちょっと変えることができれば良いなと思います。

(根本学部長) これは改めて指摘されると違和感がありますね。事務局と打ち合わせした時に見落としていました。我々の議論をちゃんと汲んでいただければ、むしろ多様性とか、寛容性とか、そういった議論だったかと思います。もちろん遊んで暮らして良いということではないでしょうから、国民の義務という考え方もあるでしょうが、ここはちょっと考えた方が良いでしょうね。

(田中委員) 7番の「繋ぐ」ということについて、人が繋ぐは良いのですが、「まったく違う一つの都市」という表現に違和感があると思いました。読んでいけばつながるとなっていますが、直接こういうのに関係してみると、人がつながるは良いのですが、まったく違うというのがどういうことかなと思いました。理解が難しいです。

(根本学部長) 改めて見ていくと指摘すべき点が満載ですね。遠慮せずに指摘していただきたいと思います。先ほどから、資源が多様、環境が多様、もちろん市民の様相も多様な、それらが従来別の自治体であったかも知れない、それが一つにつながった大きな塊として、新しいコミュニティを形成していくという思いだと思いますが、これだけだと伝わらないということですね。ありがとうございます。

(佐藤委員) 5ページの福祉関係、「支え合う」というキーワードでくくられたのは素晴らしい発想だと思います。まず細かい所を先に言うと、中ほどの、「高齢者率が約4割になりますが」、の後に「デイサービスでは元気な高齢者がボランティアとして」となっていますが、元気なお年寄りがボランティアで活躍する場はデイサービスだけではないので、「デイサービスなどの福祉施設」の方が、広がりがあるのではないかと思ったのと、その後に「在宅介護を必要とする方々には、地域包括センターを中心として、地域が見守っています。」と書かれていますが、これだと何か地域という住民の力が支えると読み取れるかと思います。市民協働というのは決して住民だけではありません。そういう意味では素案に書かれている方が適切ではないでしょうか。つまり「在宅支援を必要とする方々は、地域包括センターを中心とした、地域の資源が大いに活用されています」地域の資源という言い方であれば、地域に配置されている医療も介護も住宅も、そういうような公的なサービスを含めた支援、そこに住民も関わるといような、より正しく表現されるのではないかと思います。そしてもう

一点、次に「介護する家族の負担も軽減されます」というところで、このような表現ですと、介護するのは家族が中心であるというようになってしまっているのではないか、という議論が以前にあったかと思います。その中でやっぱり本人が大事という指摘があったかと思いますが、素案の「介護家族の負担と同時に生活の質がよくなる」というような言い方も併せて載せていただいた方が、当事者の意向や立場が尊重されているかと思います。

(根本学部長)

ありがとうございます。事務局を弁護するようなことになりますが、最初の将来像は過去2回、かなり議論して作っていますが、今回の12の未来というのは、直近の意見交換会が終わった後に急いで作ったということもあり、まだ真意が伝わっていない、言葉の運びが適切でない所が残っているようです。今日はこれで議論を続けますが、一つお願いしたいのは、今日はたたき台について気が付いたところはこのテーブルでご指摘いただいて、意見を共有しましょう。更に足りないところは赤を入れ、また集まって議論しても一回2時間程度と限られてしまいますから、このテーブル以外でもフィードバックすることをお願いしておきたいと思います。今ご指摘いただいたのは、色んなチャンネルを通じて福祉を支える。我々が過去3回の意見交換会で議論したのは、分業、専業の方向だけでは支えきれないだろう、全部税金で支えるのは難しいかも知れない。そうではなく、自助・共助・公助というように自分ができること、協力してできること、コミュニティでできること、色々なチャンネルで支えることでサービスの質が維持できるのではないか、クオリティオブライフが維持できるのではないか、そういう議論をしてきたと思います。そういうことがきちんと政策につながるように直していきたいと思っています。

(外山委員)

3ページの「満たす」の部分ですが、これはワークショップの時「攻める」という単語だったと思います。それが今日は「満たす」に変わっています。おそらくものづくりや観光が入っていた所だと思います。一番上のタイトル「あったらいいを実現する」というところですが、今はあったらいいなと思うものって、ある時代だと思います。インターネットで検索すると、「こういうあるじゃん」という時代です。ワークショップの時、もう少し攻める意見が出ていて、見たことないものを創り出す、とか攻めるべき、チャレンジすべきという意見が積極的に出ていたように記憶しています。あったらいいなと思ったのを、ではこういうものを作りました、今まで洗濯機ができた冷蔵庫ができたという時代で、もっと見たことないものを作るみたいな攻める姿勢が反映されると良いなと思います。観光発信力とか、どこにもない体験型観光とか、キーワードとしてもっと強い言葉が出ていたので、そういうのを入れた方が、今は全体的に、今を基準にしてホッとすると、こういうところがちょっと直ればいいよね、というのが出ていていると思いますが、30年後となると、もう少しここにビジョンとして示されるような強い言葉が、起業家とかチャレンジというのがいっぱい並んでくるようなカテゴリーになったら良いなと思いました。

(根本学部長)

ありがとうございます。おっしゃるように、あったらいいなというのはかなりマイルドな表現になっています。ワークショップを私も一緒にやりましたが、確かに、やらまいか、という旧浜松市の精神は引き継がれています。だから見たこともないものが実現される、誰もやらなかったことにチャレンジできる、そういう場が浜松だ、そういう議論があったかと思

ます。もちろん安心安全も必要ですが、攻めの姿勢が反映されればと思います。この(市民意識調査中間報告の)キーワードの一枚目が創造都市という浜松市が掲げる政策のひとつですが、私が言う和我田引水になりますので言うのを躊躇していましたが、文化芸術大学が赤くなっています。もちろんこの地域には静大工学部やもっと老舗がありますが、ここで文芸大というキーワードを入れていただいたのは、まさに新しくチャレンジすることにつながるのだらうと思って見せていただきました。どうしても事務局で最後までめましようとなると、まるくなってしまうのもっと尖がった内容を残すようにしましょう。これはみんなで合意できるのではないのでしょうか。

(石川委員)

7ページ5番の子どもは将来の宝というところですが、将来ということで、時間軸でみると、今現在はどうかという感覚に陥りやすいと思います。将来というと、今ここにいる私たちが宝物のような意味合いにとれるのではないかという心配を持ちました。子どもは例えば、地域の宝、社会の宝といった意識の中でみんなが愛情を注ぐ。愛情を注ぐ人は周りに一杯いる。そういう環境の中でそれこそ未来のビジョンを達成するための自信や能力の源となる、協調の精神が育まれている、そういった部分を強調できるような文章だと良いのかなと思います。小学校や中学校へ行ってからではなく、自分に自信を持つ、あるいは協調するという部分は乳幼児期に育まれるという特徴がありますので、そういった部分を含めてはいかがかと思いました。

(根本学部長)

先ほども「活かす」ではなく、「育てる」とか「育む」ではないかという意見もありました。それから、子どもは将来の宝というのは、これも多分気持ちとしては、将来を担う宝というつもりだったと思います。ですから主旨としては将来を担うことになる地域の宝、社会の宝ということだと思います。

(須藤委員)

「活かす」のところでも今のと関連していますが、中段以降に学校ではという表現があり、続けて学校教育ではという表現がありますが、ほとんど同じ意味になると思います。石川委員がおっしゃいましたが、全ての自己肯定感などは乳幼児期に育まれるということも重要な部分であるので、学校教育と自己肯定感を結びつけるのではなくて、それ以前に自己肯定感があり、学校教育の場では、という1月14日の意見交換会で教育の素案のところの学校教育の大きな役割ということで書かれていた部分がそのまま使われても良いのではないかと感じました。もう一つ、多文化共生のところでは、「認め合う」のところですが、それも小中学校では、からずっと続くところで、「外国人の子どもたちは当初戸惑いを見せます」、と書いていますが、戸惑いを見せると決まっているわけではありません。見せるかどうかは分からない部分だと思いますので、思い込みでの表現になっているのではないのでしょうか。もう一つ、下から6行目、「外国人市民が日本の文化や決まりを尊重する謙虚さが定着し」、とありますが、これも外国人が謙虚さが無いということではありませんので、尊重する姿勢が定着して、というような言葉にさせていただいた方が良い気がします。これも外国人に対する先入観が働いた気がするので、できるだけそういうようなことは排除した方が良いと思います。

(根本学部長) 後半の話はどうしても過去の姿勢にとられる恐れがありますので、細かい文言のことも、是非また、きちんとご指摘していただければと思います。

(鈴木市長) 具体的な言葉を言っていた方がいいのではないのでしょうか。
是非コピーも考えていただきたいと思います。こんなコピーが良いよとご提案ください。昔、友人の選挙の時に、子供を未来につなげるという意味をどう表現するかということで考えたのが「子どもは未来からの留学生」というものでした。是非そういう具体的なコピーをご提案いただけたら良いと思います。

(根本学部長) 是非お願いします。先ほどの7ページですが、学校教育は、ということで、一委員として思うのは、少子化ということの意味、やはり地域コミュニティに同じ年齢階層の子どもの数も少なくなってきましたし、社会の構造も変わってきます。そうすると就学前教育の対応は各家庭に任せておけば良いという時代ではない気がします。ヨーロッパでは既に義務教育の年限を下げる方向にきています。以前のように子どもは家庭で育てるという価値観の時代は学校に入るまでは行政は介入しませんでした。今は家族の在り方も多様化しています。子どもの密度も減っているように色々なことがある中で、ある程度若い小さい子供のうちから社会あるいは行政、あるいはコミュニティの中で子どもたちが育っていくということをきちんと謳った方が良いと思っています。この作業は冒頭、ロードマップで示したように、市民委員が言ったことが100%計画になっていく訳ではなく、別途並行して進んでいる行政側の検討、座長である市長さんの考え方等を上手に合体して世に出るということになります。市長さんからもご意見があったように、是非キャッチフレーズで良いアイデアがありましたら言っていただいて、もっと頭を柔らかくして提案していただきたいと思います。こういうのは材料がないと意見が出てこないものです。材料が出ると、なんだこれは、と意見が出てきます。どんどん変えていって良いものですから、積極的にご意見をお願いします。

(村田昌委員) 学校教育の場では、ということの反対の意味として、学校教育の場以外も教育の場になるということが必要ではないのでしょうか。今学校以外の場という受験のための予備校くらいしかないと思いますが、もっといきなり小学生が職業の勉強をするなど色々あると思います。そういう学校教育の多様性のようなことをもっと明確に出した方が良いのではないのでしょうか。もう一つ細かい話ですが、「老いる」というタイトル、他のタイトルは全部強い意志を持って行動するという言葉ですが、老いるは別に強い意志を持って老いる訳ではありません。むしろ老いたくないぐらいの意思を持っていると思います。ただその次のカッコいい老い方はその通りだなと思います。老いるという言葉について、代案は思いつきませんが変えた方が良いと思います。

(根本学部長) ワークショップでは確か色々な意見が出ていたと思います。この形で十分に出ていないのではないかとということであれば、何か検討が必要かと思っています。後半の「老いる」が良いかということで、カッコいい老い方というのは良いというご意見ですね。どうしても受け身っぽくなってしまいますので、生涯活躍できる、というようなニュアンスがあれば良いかと思

ます。

(河原委員)

14ページ「使う」のキャッチフレーズ「私のオフィスは喫茶店、隣で息子が算数の授業。」に違和感を持ちました。算数と言う言葉から小学生と思われるのですが、喫茶店はお金を出して飲食する場所で不特定多数の人が出入りする場所です。ここで、小学生（息子だけに限定）が授業を受けるということが理解できません。喫茶店の言葉自体も30年後に生きているでしょうか。

それから「老いる」とか「カッコいい老い方」などの言葉が、別の箇所によく出てきますが、ICT技術向上の目覚ましい時代においては、時代を読み状況に応じた生き方の出来る老い方が「カッコいい」ことだと思いません。

現在の高齢者と違って、今の30代40代の30年後は、IT利用については、日常そのものだと考えられます。そこで必要なのは、情報をしっかり読み解くことではないでしょうか。

学校教育中でのメディア教育がここでは取り上げられていますが、社会教育の一環として、一般市民にメディアリテラシーの研修が必要ではないかと思われます。身近なところで常に正しい情報の捉え方を考える機会を作っていただきたいのです。

「使う」の言葉と、キャッチフレーズを再考していただけるとよいと思います。

(根本学部長)

今思いついたので一個キャッチフレーズを提案します。「どこでもオフィス、どこでもサロン、どこでも勉強」ということではないでしょうか。ユビキタスという言葉は最近廃れましたが、当たり前のように情報環境がある。今までならビジネスをするなら家賃を払ってオフィスを作らなければいけない、サロンに行くなら喫茶店に行かなきゃいけない、分業社会でした。それが、ここがオフィスだと思えばオフィス、ここがサロンだと思えばサロン、ドラえもんの何でもみたいな、そういうイメージではないでしょうか。

(外山委員)

ちょうど発言しようとしたらかぶってしまったのですが、私としては、「私のオフィスは喫茶店・・・」というのは、「働く場も学ぶ場もオンライン」とか「働く場も学ぶ場も世界とつながる」というような表現の方が良いように思いました。

2ページの「浜松はクリエイティブシティ（創造都市）」というところですが、内容が音楽と文化というか、音楽にかなりフォーカスされていると思います。あまりここは創造都市が語られていないと私には思えます。例えば、建築とか、リノベーション、商業デザインとかアートとかも十分創造都市に寄与するはずですし、ましてや市民一人ひとりの創作的な作家性も寄与するはずですのでちょっと内容が薄いかなと思っています。デザイン、アート、クリエイターの単語が入ってきて、それをどのように生かすのが創造都市なのかということがもっと議論され反映されてくると良いと思っています。

(根本学部長)

創造都市というのは、かなり広い領域をカバーすることですから、その中で今の時点で言うと浜松市は音楽部門のユネスコ創造都市ネットワークというのに手を挙げていますが、それが全てという訳でもないでしょう。

広い意味でのアーツ、アルチザンという場合はオートバイを組み立てるエンジニアもアルチザンですから、そういう広い意味での技が生きていく、それが新しいビジネスになっていくというような説明はあった方が良くと思います。

(須藤委員)

今外山さんがおっしゃったクリエイティブシティの内容ですが、後段の最後の「認め合う」に、外国人と一緒に住んでいることによって、これだけ新しい文化が生まれているよと書かれていながら、最初のクリエイティブシティの部分では情報都市のこゝしか書かれていないので、ここに外国人も一緒になった文化というのを取り入れていけば良いのではないかと思います。

(根本学部長)

ありがとうございます。ちょっと一言余計に言うと、クリエイティブシティ論の中で、非常に有力な考え方で3つのTがあります。タレント（才能）、テクノロジー（情報に限らず技術・技）、トレランス（寛容性）多様なものを受け入れる寛容性。21世紀の発展する都市というのは、多様な才能を持った、国籍性別にとらわれず、それが花開く場所なのだということです。その部分も事務局と語ってみたいと思っています。

(宗像委員)

「老いる」というところ、どうしても老いたくないという思いが強くて、私個人の意見としてはそういうネガティブな気持ちに皆さんが囚われているからこそ、そういうネガティブな心が生まれてくるのではないかと思います。敢えてこの言葉を使ってほしいと思う一方、私たちは健康ではない方々を支援していく中で、やはり生きること、生き抜くことを支えるということをテーマにしていますので、変えるとしたら、「生きる」ですとか「生き抜く」という言葉が良いのではないかと提案します。

(松尾委員)

まったくかぶってしまいました。ちょっとちがって「生き抜く」ではなく「生ききる」かな、と思ってそれだけ言わせていただきます。

(根本学部長)

医療・福祉あらゆるものがセットで、そして市民の一人ひとりが、思いがちゃんと遂げられる生き様ができる、そういうまちになりましょうということなのでしょう。時間が迫ってきましたので、今日これだけはということがあれば、まだ発言されていない委員の皆さんからも一言いただければと思いますがいかがでしょうか。

(鈴木委員)

7ページの「活かす」のところの最後、先ほども出ていましたが、学校・地域・職場が連携して子どもに関わっていくとありますが、やはり企業や職場が若い人たちも含めて、地域の子どものための職場体験などを含め、かなり教育の要素を担ってくるようになると思いますので、企業・職場という言葉も混ぜていただけたらと思います。

(根本学部長)

教育を支える人たちは非常に多様で、学校がやればよいということではなく、企業・職場という要素があるということですが、具体的にこういう姿、こういう形というのがあれば併せてご提案ください。

- (鈴木委員) 職場体験などがあると思います。
- (根本学部長) 子どもたちが自分の親以外は大人の姿、昼間働いている姿を見るチャンスが減ったというのは課題ですね。あとはどうでしょうか。
- (山田委員) 9ページの「繋ぐ」のところ、人がつなぐで、人とのつながりが書かれていると思いますが、市外から移り住んで人々のつながりを一番感じたのは浜松まつりです。浜松まつりのことはあまり書かれていなくて、外からの目として見ると、浜松まつりは結構独特というか、人々のつながりがすごく強いお祭りで、私の地元にはそういう大きなつながりがなかったので、そういったところも浜松まつりに関しても含めて、ここを考えてもらえたらと思いました。
- もう一つ、途中で「華やかさやワクワク感を得ることができます。」の後に「住居空間としても洗練されていて、高層マンションに、多くの市民が移り住み」というふうに書いてあります。その後、最後の2段目の段落で「昔ながらの田舎の人付き合いが根付く中山間地域では心穏やかに過ごす福祉施設が立地し」と書いてあって、華やかさやワクワク感を得たい若者はまちなかに住んで、そうではない高齢の方は外に住んでもらうということがここからは感じ取れました。他のところでは人口の4割が高齢者になるということが書かれているのに、まちなかの部分に関しては高齢者には外に行ってもらってという感じを受けたので違う感じにしてもらいたいと思います。
- (根本学部長) 改めて読むとご指摘の通りです。むしろ個人的な意見を含めて言うと、中山間地域は上手に更新していったり、引き継いでいったりして、活力が失われないようにということもありますし、それから都心立地型のマンションは高齢者に優しいものです。新幹線の駅に近いとか、車がなくても外出できるとか、何か思い込みがかなり入ってきている気がします。
- (鈴木市長) 東京がもう失敗しています。郊外にこういう施設を作ったら全然だめで、結局隔離されているような感じを受けてしまいます。逆にどんどん都心に戻ってくる。記述している内容はひとつ前の時代のことですね。
- (根本学部長) 高齢者は心穏やかではなく、刺激があった方が良いということですね。
- (鈴木市長) まつりの指摘は非常に良いと思います。浜松まつりというのはものすごくコミュニティのベースになっていて、若い人にいきなり地域社会に入ってきて来いと言っても中々入って来ません。まつりで入ってくる、次に消防団に入れられて、気が付くとどっぷり浸かって、年齢がいくと自治会の役員になるという流れがあります。実はおまつりの持つ意味は非常に大きくて、30年後に浜松まつりが廃れていたら浜松のコミュニティはかなり崩壊しているのではないかと思います。やはり外からの目で評価していただけののは非常にありがたいことです。
- (根本学部長) ありがとうございます。大体予定していた時間が迫ってきました。改めてこうやって活字にしてみると、指摘が満載です。まだまだ生煮えのたたき台だと思しますので、批判的な目も入れて、我々はこれをもんでいき

と思います。一つお願いは、今日の資料の段階で、どんどん赤を入れていただきたいというものです。次の会でまた議論ができるように進めていきたいと考えています。市長から何かありますでしょうか。

(鈴木市長)

本当にありがとうございました。良いご指摘を沢山いただいたと感じています。私は言葉というのはとても大事だと思っています。特にこういう計画を作る時には言葉の使い方一つで、持つ意味やイメージが変わってしまいます。細かいことと思わず、「てにをは」の使い方も含めてご意見をいただければと思います。是非良いものを作り、作って棚に乗せておくのではなく、こういう未来を作るために我々も頑張っていかなければなりませんので、魂を入れて作りたいたいところです。実は先ほどの話に関連しますが、ちょうど35年前、松下政経塾ができたころ、松下幸之助さんが21世紀の未来像を描いた本を出しました。これは物語風で、どのような設定かという、ダメな国の大臣が来て21世紀の日本から学ぶという設定でした。この前読み返してみたら、ダメな国の大臣が「うちの国はこんなですよ」という発言が今の日本にほとんど当てはまります。これには驚きました。確かにそうだなと思いました。こういうふうにしようと思って、理想の20世紀を掲げて、当然なっていません。それが反面教師として、ダメな国と日本がオーバーラップしてしまいました。そうならないためにここで作る理想の浜松の未来に向けてしっかり取り組んでいかなければいけないということです。魂を入れたものにしたいので、是非ご意見をいただきたいと思います。

(根本学部長)

ではこれで進行を事務局に戻します。

6 閉会

(事務局)

今日はありがとうございました。叩かれがいのある議論ができたと思います。今回の意見を反映して、2月上旬に議会に報告します。今回の皆様の意見と議会の意見を踏まえて修正したものを3月15日の会議の前に皆様にお送りします。それに赤を入れていただければ、3月15日には踏み込んだ議論ができると思っています

これをもちまして、第3回浜松市未来デザイン会議を閉会します。なお、第4回は平成26年3月15日の土曜日、午後2時から、会場は同じ全員協議会室にて開催しますので、ご案内します。それでは、お気をつけてお帰り下さい。